

自閉症は津軽弁を話さない

コミュニケーションを育む情報の獲得・共有のメカニズム

企画者	松本敏治（教育心理支援教室・研究所 ガジュマルつがる）
司会者	菊地一文（弘前大学大学院）
話題提供者	松本敏治（教育心理支援教室・研究所 ガジュマルつがる）
指定討論者	佐藤晋治（大分大学大学院） 橋本洋輔（国際教養大学）

KEY WORDS: ASD 情報の獲得・共有 言語

【企画趣旨】

松本(2017, 2020)は、「自閉症は津軽弁を話さない」との風聞をきっかけに、自閉症と方言について一連の研究を行った。調査結果は、ASD 児・者の方言不使用という印象が全国で見られる普遍的なもので、方言語彙の不使用も認められることを示した。これらの結果をもとに、社会性の障害の側面から ASD 児・者の言語習得および言語運用について考察した。さらに、方言学研究や認知心理学の知見を整理し、ASD 児・者の社会との関わり方や社会的ルールの獲得・運用について理論検討を行っている。

本シンポジウムにおいては、松本から上記に関する話題提供を行い、佐藤氏からは発達臨床の立場から本研究のもつ意味について、橋本氏からは言語学の立場から本研究のもつ意味について指定討論を行う。

【話題提供者の趣旨】

松本敏治：本話題提供では、ASD 児・者が示す諸特徴について、属する社会集団が共有する認知・知識・社会的ルール等の共通基盤の獲得と運用の側面から検討していく。

リチャード・ドーキンスは「利己的な遺伝子」の中で、人間の文化を形作っている常識、風習、慣習、知識、振る舞いなどは人の脳から脳に受け継がれる情報だとみなし「ミーム」と呼んでいる。このような情報の伝達において社会的能力は重要な役割を果たしている。滝川（2018）は、子どもは大人との体験を社会的に分かちあい二人三脚の探索を通じて大人（その社会集団）の意味の世界を取り込むが、ASD 児はこれに遅れを示すとしている。

所属する社会集団の成員に共有されている認知・知識・社会的ルールの一部は、大人や周囲の人々との「自然な、対人的やり取りの中で子どもに受け継がれるものである。この過程を通じて、子どもたちは同じ認知・知識・社会的ルールを獲得し均質化していく。しかし、ASD 児では、「自然な、対人的やり取りを通じた伝達を中心とされる情報の獲得が困難となる。ASD 児・者が暗黙の知識やルールの獲得に困難を抱えることはよく知られている。代わりに個人的体験を通じた、オリジナルな認知・知識・社会的振る舞いを獲得する。これらの中には周囲の多数者が共有するものとは相容れない場合もあり、「感覚の異常」「こだわり」「独特の興味・関心」とみなされることとなる。一方、明示的あるいは組織的に提示された認知・知識・社会的ルールなどについては知的な問題を抱えなければ獲得されると考えられる。

上記のような「自然な、対人的やり取りを通じた伝達」において、ASD 児・者が苦手とする社会的手がかり（表情・視線・声の調子等）への自発的注意、共同注意、意図理解などが重要な役割を果たす。さらに、この苦手さは伝達・獲得という側面にとどまらず、「知識としては知っていても現実場面で実行できない」など認知・知識・社会的

ルールの運用という側面でも問題を起こすことがある。

つまり、ASD 児・者の社会的能力の問題は、認知・知識・社会的振る舞いの伝達・獲得と運用に影響していると考えられる。

【指定討論者の趣旨】

佐藤晋治：インクルーシブ社会では、個体要因と環境要因の相互作用の結果として障害を表現する。ASD 児・者の方言不使用についても同様である。つまり言語を「記号」としてではなく、「社会的なもの」（言語行動）として捉え、その不成立を個体要因と環境要因の相互作用から考える。そして環境要因の不備を同定し、整備することにより言語行動の成立や獲得を目指す。またその環境要因の丹念な分析からは、標的となっている言語行動の成立や獲得に必要な認知機能を推定できよう。

一方、近年は ASD 児・者の社会脳の特異性を定性的なものではなく、発達のダイナミクスを考慮しながら解明していくことの重要性が示唆されている。しかし、ASD 児・者の社会性の困難さは心の理論などの困難さによって説明されることが多いが、そこでは発達のダイナミクスを十分に考慮しているとは言えない。

以上より、松本氏による検討は、(1)方言使用を社会的なものとして捉えている点、(2)認知発達のダイナミクスから検討しようとしている点で、意味のあるものと言える。

橋本洋輔：言語学の中でも、特に方言学や応用言語学の立場から本研究の意味について議論したい。最初に、応用言語学で言われる「沈黙期」を取り上げたい。定型発達者の第一言語習得において、子どもが話しかけられる言葉を聞き、ことばの規則を発見し、話すための準備をする期間だと考えられている。ASD 児の場合はこの沈黙期がどのようなものになっていると考えられるだろうか。例えば、ASD 児の沈黙期は自分に「相応しい言葉」が十分獲得されるまで長くなり、それがメディア等からの共通語獲得まで言語使用が留保されるということは考えられるか。

また方言学では共通語と方言などを切り替えることを「コードスイッチ」と言うが、この「コード」に含まれるものは、ASD 児の研究からどのようなものだと考えられるだろうか。以上 2 点について議論したい。

（文献）

松本敏治（2017）自閉症は津軽弁を話さない 自閉スペクトラム症のことばの謎を読み解く、福村出版。 / （文庫版）角川ソフィア文庫（2020）。

松本敏治（2020）自閉症は津軽弁を話さないリターンズ コミュニケーションを育む情報の獲得・共有のメカニズム、福村出版。

(MATSUMOTO Toshiharu, KIKUCHI Kazufumi, SATO Shinji, HASHIMOTO, Yosuke)